



分かり



きったこ
、

川崎ゆきお

「皆が分からないのに、一人だけ分かっている人がいる」

「詳しい方ですね」

「いや、情報は我々と似たようなものだ。だからその情報だけでは一体どうなるのかは分からない。ところが分かりきったことだと言っている人がいる」

「特別な情報を得ているのではありませんか」

「いやいや、そんな情報はない。あったとしても、未来を予測するようなものだね。最終的には分からないのが結論だ」

「神のみが知る情報じゃないのですか」

「それは情報や、分析ではない」

「知りようがないことですね」

「そうだね。予測はできるが、確実性が薄い。そのため、予測というより希望になる」

「じゃ、その人は希望を述べただけなんじゃないですか。または自分の主張を言っただけとか」

「常識だと言っている」

「じゃ、私達が常識がないと」

「あらゆる情報に目を通した。よく調べないで言っているわけじゃないし、色々な情報の真意を探ったり、虚報、誤報ではないかと疑ったりもした。非常に常識的にね。それなのに常識で考えれば分かることで、分かりきったことだとその人は言う」

「神のみが知る未来予測情報を得たのではないですか」

「マジナイは常識から外れるだろ。予言も常識から外れる。常識があれば、そんなものは使わない」

「じゃ、何でしょう。考えなくても、考察しなくても、分かりきったことだというのは」

「考えられる論理は一つしかない」

「あ、はい」

「その人は、実際には一番何も分かっていない人なんじゃないかとね」

「確実に分かっていると引きつけている人が、一番分かっていないと」

「そのパターンしか残っていない」

「はい」

「そう判断するのが常識だろ」

「そうですねえ」

「だから、その人の意見はスルーすることにした」

「結果的にはどうだったのです」

「それがね、その賢者様、答えを言わなかったんだ。言わなくても分かりきっているといってね。考える必要もないと言って、答えを公言しなかった。これだね。上手いねえ。どちらに転んでも嘘はついていない。どちらに転んでも合っているんだ。どちらに転ぶかを言っていないからね。言わなくても分かるって言い方だ。これは巧みだねえ。逃げ道を作っている」

「要するに」

「肝心要のところは言わないと言うことだ」

「でも、その人は、いちいち口に出さなくても、もう分かりきっているので、言う必要もないわけでしょ」

「本当は分かっているんだ」

「それなら安心です」

了